

< 今日の説教のポイント ルカによる福音書 13 章 10~17 節 >
安息日の会堂での出来事。この場面、見るべきはいつもイエス様。

1 女は礼拝に来ていただけ。イエス様が治されたことが重要。

ここでまず注目しておきたいのは、病を負っていた女はイエス様に治してもらおうと思って来たのではなく、礼拝に来ていたのだという点です。女の信仰心ではなく、不思議な力を持っておられるイエス様について考えることがこの個所のテーマなのです。

2 「病の霊」(11)「サタン」(16)ではなく、イエス様が主役。

この病を負う女のことが「病の霊に取りつかれている女」(11)や「サタンに縛られていた」(16)と表現されています。それで悪霊やらサタンが本当にいるように思い、それらの存在を考えて怯える人がいます。しかし、それはおかしいですね。この出来事で大事な点は、イエス様がそれらを圧倒されたということなのですから (4:31-37 に明らか!)。さらに、イエス様は病の中にあつた女のことを「アブラハムの娘」(16)と呼ばれて、忌むべき存在などとは全く思われていないのですから。

3 「偽善者たち」の問題点 ⇔ イエス様から学ぶこと。

会堂長は、十戒の教えを思いながら、「安息日は神に思いを傾げるべき日なのだ」と考えたのでしょうか。それだけ考えているとどこも間違っていないかもしれません。しかしイエス様は、「では、安息日にあなたたちが自分の牛やロバにしていることはどうなのか」と問い返されたのです。自分がやっていることには目をふさぎ (あるいは、気づかず)、人がやっていることに対しては「過ちは過ちだ」と言う。まさに私たち自身の姿なのではないのでしょうか。また、のどが渇いている牛やロバを思い、苦しんでいるその人の立場から考えることが欠けていたことに気づいて「恥じ入った」(17)のかもしれない。それはまだ光明があるということです。このイエス様の重要性に気づくという光明です。一方、群衆は喜びんだ(17)とあります。しかし、重い病が治ったことを見て喜ぶだけでは十分ではありません。イエス様がいやされたということをしっかり考えて、このイエス様の重要性に気づいて喜ぶところまで行かなければなりません。このイエス様を見上げて歩むときに、もう病の霊もサタンも心配ない、また、苦しんでいる人の立場から考えることをしていいのだと思えるし、して行こうとする者に私たちもなれるのです (ルカによる福音書 4:16-21 参照)。